

東京学芸大学書道科同窓会

# 硯心会だより 第11号

発行  
2023年6月8日

## 卒業・修了おめでと〜うございます

昨年度卒業を迎えた新硯心会会員を代表し、理事にお言葉をいただきました。卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様の活躍を祈念しております。(事務局)

## 2022年度卒業(71期)・新理事挨拶

71期理事 寺松 錦 てらまつにしき

この度、71期の理事に就任いたしました寺松錦と申します。硯心会を通して、東京学芸大学を卒業された尊敬する先輩方と交流を持てますこと、大変嬉しく思います。

学部生の間は、卒業記念展や専攻展に足を運んでいただいたり、作品や展示についてご指導いただりと大変お世

話になりました。心より感謝申し上げます。

今後は硯心会の一員として、さらなる会の発展に尽力してまいります。不慣れな点が多々あるかと思いますが、何卒よろしくお願い申し上げます。



卒業記念展会場風景

## 新任教員あいさつ

2022年度末にて、橋本栄一先生、岩切誠先生が退職を迎えました。

2023年度からは、加藤泰弘、石井健に加え、草津祐介、城間圭太を加えた態勢となります。4月から新しく着任されました教員からあいさつをいただきました。(敬称略)

特任准教授 城間圭太 (53期) しろまけいた

53期の城間圭太と申します。学部、大学院を修了後、高等学校教員を経て、2016年に中国へ渡り、中国美術学院(修士課程)と浙江大学(博士課程)にて中国書道史および書の実技を学んでまいりました。

本年4月より、東京学芸大学にて特任准教授として「漢字研究Ⅱ」や「書道史研究A」といった授業を担当しております。

硯心会の皆様方には今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

准教授 草津祐介 (52期) くさつゆうすけ

52期の草津祐介と申します。昨年、

東京学芸大学にすでに転任をしてはいましたが、本年度より准教授として勤務することになりました。気がつけば、学部、修士課程、博士課程(論文提出による博士)と、すべての学位を東京学芸大学でいただき、最も長い期間を過ごした学校となりました。

今年度は「書道科教育法Ⅰ」や「書道科教材論Ⅱ」等の教育法の授業や「書論研究」といった授業、書写教育に係る授業等を担当いたします。

今後とも卒業生の皆様に助けていただきながら、書写書道教育を担う人材を育成していきたいと思っております。ご教示のほどよろしくお願いいたします。

## 古谷 稔(11期) 講演会「書を志す人へ」

65期 込山誉実

二〇二二年八月二十七日(土) 十三時三〇分より、東京都美術館講堂にて、本学11期卒業生・古谷稔氏による講演会「書を志す人へ」が開催されました。講演内容をまとめ、紹介します。

講演の冒頭、今回の講演会に至った経緯、東京学芸大学での学びを振り返られました。そして、今回の硯心会書

展の会場である東京都美術館を切り口に、書の鑑賞場所についての話がありました。

茶の湯における床の間飾りとしての書や寺院の壁面、平等院鳳凰堂の内部にある色紙型などにも言及され、書の鑑賞における「場」の重要性を述べられました。

古谷先生は大学時代、田邊古邨先生に書論を、伊東参州先生と続木湖山先生に漢字を、水田光風先生に教育書道を、鈴木竹影先生に仮名を、山田正平先生に篆刻を、漢字仮名交じりの書を吉田鷹村先生、藤原楚水先生に中国書道史を、鈴木梅溪先生に日本書道史を教わったと述べられました。

特に、鈴木梅溪(1887~1973年・田中親美に師事)先生の授業では、巻物や掛物や複製本等を、持参下さり、それを見ながら鉛筆でノートに模写するという授業があったとのことでした。また、模写の方法の一つとして、透き写しなどの学書法も紹介され、そういった学習法も必要に応じて行なっていく必要があるとのことでした。鈴木梅溪先生の臨書帖は現在成田山書道美術館に収蔵されているとのことでした。

話の中で、古谷先生は自身が書道史

の研究者を志した時期を振りかえると、最初は高校で非常勤講師をされており、時には部活や合宿で実技指導をされていたそうです。その後、少し非常勤講師の数をセーブしながら、東京教育大学(現在の筑波大学)の国文学科に聴講生として受講し、当時講師であった小松茂美先生に出会ったと仰っていました。そして書の歴史を調べ、当時自宅から近かった東京国立博物館の常設展などで、古典の鑑賞などを通じて段々と深みにはまり、書道史を研究していきたいと思うようになったとのことでした。

また、古谷先生は、書の学び方、書の道というものを考えた時に、書を学問的に研究していく書学、臨書や自運などを通して作品を書く書作の二つがあり、書を学ぶ上では、書字と書作の両輪が大切であると、その重要性を説いていました。今回の講義では、書を志す人のために、日本書道史の大まかな流れについて、スライドを示しながら、分かりやすくお話しいただきました。

その内容は、大まかに以下の六つに分けられます。(1)書の学び方、秋萩帖をめぐって、(2)日本の書の基盤、王義

之書法を学ぶ、(3)和様の確立、和様漢字と平仮名書法の完成、(4)中国大陸の影響、鎌倉から江戸まで、(5)江戸の和様、(6)近現代の仮名。

(1)では、「秋萩帖」を切り口に、その概説と、「秋萩帖」に付されている王羲之尺牘の臨書部分の紹介、さらに紙背にある『淮南子』について言及されました。また、「秋萩帖」は巻物です。帖ではなく秋萩歌巻とも称されていたということは、仕立て上げられた書の形式によって変化する書跡の名称を考える上で大事な事だと感じました。「秋萩帖」の江戸時代の摹刻本や、良寛の臨書と伝えられる作品の鑑賞を通じて、「秋萩帖」が古典として学ばれて伝承されていく学書の一過程を紹介されました。

(2)では、東大寺献物帳のうち国家珍宝帳に言及され、奈良時代に王羲之の書法が流入し、愛好されたことの証拠でもある資料の重要性を述べられました。また、双鉤填墨で作られた「喪乱帖」や、光明皇后による王羲之「樂毅論」の臨書、空海「風信帖」、最澄「久隔帖」等の紹介を通じて、日本書道の基盤となった王羲之書法の重要性について述べられました。

(3)では、小野道風「屏風土代」の書から、三筆や王羲之の書とは異なる新しい和様表現であるということ、そしてそれは藤原行成に至って完成するという流れを紹介され、さらに藤原行成「寛仁本白氏詩巻」の落款部分の見せ消ちなどにも注目しながら、当時の書写状況などを解説されました。漢字と仮名の調和という観点からでは、「雲紙本和漢朗詠集」に言及し、和様化した漢字とそれに合わせて書かれた仮名の調和が段々と始まっていく様を読み取っていました。まるやかな行成様の書風に対して、藤原忠通の法性寺流の書風は少し強く、漢字の散らし書きのような珍しい作例は非常に興味深く感じました。

(4)では、鎌倉時代に至り、貴族社会から武家社会へと移りゆく中で、禅僧を一つの重要なポイントとして捉えられました。法外の書としての魅力がある、大燈国師「関山字号」や、他にも黄檗僧である隠元、木庵、即非らの明人の書風は、後に唐様が普及していく地盤となったと述べます。江戸に入ると北島雪山が唐様の始祖として現れ、細井広沢などの弟子や、幕末の三筆の書跡を紹介し、江戸時代における中国

書法の影響について述べられました。

(5)、(6)では、松尾芭蕉が奥の細道の旅に出た時に読んだ出羽三山の短冊や会津八一の自画賛など、書における日本語の表現の展開として、自詠の句を書写した松尾芭蕉や連綿や変体仮名をあまり多く用いることなく、平易ながらも味わい深い書風である会津八一に着目し、現代へ繋がる漢字仮名交じりの書への展開を考察されました。

今回の講演では、古谷先生が学生だった頃の貴重なお話や日本書道史を紐解きながら研究の成果や知見を分かりやすく教えていただくことで、書志す者にとつてとても有意義であったかと思えます。

古谷先生は、日本の書道——ひいては日本の伝統文化を継承していく重要性も訴えられました。そして、国境を越えた文化の伝播、交流も段々と深まってきていると述べられ、西洋においても、日本書道に対して眼の肥えた方や自宅に床の間を作られるような外国の方もいらつしやるとご紹介いただきました。どのような形であれ、自国の書文化に触れ、学び、書学、書作共々、その魅力や歴史を伝えていく一端を担えるということは、とても素敵なこと

であると感じました。

最後に古谷先生は、本格的に研究を始めたのは卒業してからだが、大学在学中にはそういった研究のヒントをたくさん得ることができ、大変居心地が良かったと述べていました。

今回の講演を通じて、参加者である高校生や大学生らの若人たちは、たくさん気づきやヒントを得ることができたことと思います。また、すでに教壇に立たれているような世代の方々にとつても、改めて、書における自己の課題を見つめなおすきっかけとなったことと思います。古谷先生、この度はご講演頂きありがとうございました。

最後に、講演後のアンケートでは以下のような感想を頂きましたので、その一部を抜粋してご紹介させていただきます。

〈アンケート・感想〉

「学ぶ視点が様々ある書道は、どこまでもつきつめていけるものがあるからこそ興味深いし、これからもっといろんな視点をもって貪欲に学んでいきたいと思いました。」(十代、高校生、女性)  
 「最後の近代的な仮名のところで、それぞれの時代によって適した仮名があることを学び、これからの私自身の書

仮名の創作に活かしていきたいと考えました。」(十代、高校生、男性)

「一生涯にわたる書の道の追究について学べてよかった。学生時代の今、できることを丁寧におこなっていききたい。(以下略)」(二十代、大学生、女性)  
 「たくさんさんのスライドにての作品解説がわかりやすかったです。先生在学中のお話なども聞けて有意義でした。」(五十代、高校教員、女性)

「昔の書道史を思い出しました。とても楽しく聞かせて頂きました。ありがとうございました。」(八十代、元小學校教員、女性)

今年度の活動について

二〇二三年三月四日に、アルカデア市ヶ谷にて「2022年度春季硯心会理事会」が開催されました。

以下、理事会にて承認されました本年度の活動について、ご案内いたします。

第47回学芸書道全国展

併催 第42回硯心会書展

特別展示33期有志展

会期は2023年8月23日(水)～30日(水)、東京都美術館2階第4公募展示室にて開催。詳細は同封の案内状をご参照ください。

硯心会書展への会員の皆様の作品出品、学芸展への児童・生徒・学生の作品のご出品を是非お願いいたします。

学芸書道全国展作品受付期間

7月7日(金)～14日(金) 必着

小金井郵便局留

※要項にて詳細を確認ください。

硯心会書展締め切り 6月30日

※要項にて詳細を確認ください。

硯心会ホームページにて要項、

出品票がダウンロード可能。

合同同窓会 8月27日(日) 17時半



講演の様子



開始 ※詳細は同封の案内を参照。  
総会 8月24日(木) 10時〜11時  
東京都美術館講堂

講演会 8月24日(木) 15時〜16時半、東京都美術館講堂にて。本年度は、16期の伊藤滋氏にご講演いただきます。詳細は硯心会書展出品者には郵送にて、会員の皆様にはホームページにて告知いたします。



東京都美術館での開催となつてから、毎年併催しております同期展について、今年度は33期の同期展を併催いたします。同期展について、33期・殿村美奈子理事よりご挨拶をいただきました。

### 33期有志展開催のお知らせ

33期理事 殿村美奈子

この度、硯心会書展特別展示として「33期(1985年卒業)有志展」を開催いたします。

思い返せば38年前、卒業制作展を上野の森美術館にて開催致しました。指導教官としてお世話になりました中村閑葉先生はじめ、諸先生方の熟練の作品とともに、4年間の集大成の私たち

の作品発表の場として学芸大学の芸術館とまた違った緊張感がありました。

今回、還暦記念として同じ上野の地、東京都美術館にて硯心会書展有志展開催できることは大変感慨深く、これまでの歩みとこれからの新たな挑戦や希望を感じていただければと存じます。

それぞれの個性溢れる書作品とともに、出版された刊行物なども展示する予定であります。どうぞご覧いただけますようお願い申し上げます。



帝国ホテルにて謝恩会

### 各硯心会書展開催予定

#### 千葉硯心会

#### 第50回 千葉硯心会書作展のご報告

令和4年8月9日〜14日、千葉硯心会書作展は50回の記念展として開催されました。千葉硯心会は昭和46年に発足し、翌47年第1回から展覧会を重ねてまいりました。過去5回の記念展に倣い、これまでの写真集・作品集の陳列展示や新たな作品集の作成などの取り組みを行いました。

作品集には、本会発足のきつかけを作ってくださった浅見錦龍・揚石舒雁両先生の遺作をはじめ、出品者計37名の作品写真を掲載いたしました。また、昨年度から世話人代表を務めていただいております高橋敏行先生や今の世話人一同のご尽力のもと、「千葉硯心会・書作展五十余年のあゆみ」、「過去の世話人一覧」なども掲載できました。

出品者の皆様におかれましても、記念展に相応しい力作を多数お寄せいただきました。盛会裡に終了できましたこと、深謝申し上げます。

新たな半世紀に向け、会員一同、いっそうの研鑽を積み、切磋琢磨していく所存です。

第51回展は、千葉県立美術館で8月1日〜6日の開催予定です。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。 石井昭正(31期)



第51回千葉硯心会書作展  
会期 令和5年8月1日～6日  
場所 千葉県立美術館

埼玉硯心会

令和4年7月30日～8月2日の日程で埼玉会館第三展示室において第43回埼玉硯心会書作展が開催されました。コロナ禍のため2年間の延期を経て何とか開催に至りました。25名の作品を展覧しました。今年の暑さは格別、感染拡大の懸念もあり心配でしたが多くのご観覧を頂き、盛会の裡に無事終了しました。暑さの中ご来場下さいました皆様有り難うございました。

事前の作品研究会も会期中も、これまで通りとはいきませんでした。ゆつくりと作品鑑賞が出来て、会員が互いに批評し合ったり、会員相互の交流ができました。

第44回展は、令和5年7月29日～8月1日、埼玉会館第一・二展示室で開催予定です。4月から総会・研究会と集まって準備しています。よろしくお願いたします。 杉山恵美(25期)

第44回埼玉硯心会書作展  
会期 令和5年7月29日～8月1日  
場所 埼玉会館第一・二展示室



群馬硯心会

群馬硯心会書作展は、令和2年1月の第14回展以降、社会情勢を鑑みて開催を見合わせております。この間に26期の計良袖石(裕佳)氏と18期の小倉釣雲(正俊)氏が相次いで逝去しました。大切な2名の同志を失い、会員一同痛惜の念に堪えません。遺志をしっかり受け継いで群馬硯心会を守ってゆきたいと思えます。

〈夫が見つめたもの 計良袖石展〉  
令和4年11月19日～22日

高崎シティギャラリー第6展示室  
令和3年11月に逝去した計良袖石氏の一周忌に代えて開催された展覧会。主催は妻の雅代氏(29期)。

袖石氏は書家・篆刻家としての活動の一方、新潟大や相模女子大、県内高校でも教鞭を執った。作家・教育者・学者としての3つの顔を窺い知ることが出来る幅広い展覧内容となった。

会場には作品の他、氏が目次や印箋の木版を手掛けた「二止道人印譜」等も陳列された。

〈小倉釣雲遺墨展〉

令和5年1月6日～9日

高崎シティギャラリー第2展示室

令和4年1月に逝去した小倉釣雲氏の遺墨展として、「第二十回釣雲書道研究会展」と併せて開催された。逝去の直前に最期の力を振り絞って19回目の社中展を行った氏にとって、今回展の開催は悲願であった。

釣雲氏は長らく県立高校に奉職し群馬の書道教育界を束ねた。また群馬県書道協会の会長も務め、教育者と作家の両面で活躍した。会場には作品の他、著作書籍も多数陳列された。

永田 明(58期)



計良袖石展の様子



小倉釣雲遺墨展の様子



## ピックアップ 会員の個展報告

### 杉山惠泉書作展

令和4年11月22日から27日、銀座・洋協ホールにおいて、第26回たかむら会展が開催されました。そして、併催の形で個展コーナーを担当させていただきました。吉田鷹村先生のご指名を頂きました。ただ、前回展終了後の先生のご逝去、長いコロナ禍の到来で苦悩の日々が続きました。22点を展示。光太郎の詩やみすゞの詩、漢詩など、心動かされた言葉に出会って書けた作品です。

特に、日常詠み続けている自詠歌で、折帖などの作品が出来ました。コロナ禍でも、本当に大勢の方々にお運びいただき、至福の時を過ごすことが出来ました。感謝ばかりです。25期の皆さんにも来ていただいて、同窓会のようにでした。ありがとうございました。杉山惠美(25期)

展覧会(個展、同期展)の開催予告、開催報告、出版等の情報を事務局までお寄せください。



### 理事変更

以下の理事変更、および新規就任の連絡がありました。どうぞよろしくお願ひします。(事務局)

- 32期 櫻田晴子(理事変更)
- 53期 城間圭太(理事変更)
- 71期 寺松 錦(卒業)

(敬称略)

住所変更や理事の変更がありましたら、硯心会ホームページからお知らせください。



## 書道学科からのお知らせ

東京学芸大学では、学部が令和4年度に改組されて、学校教育教員養成課程中等教育専攻書道コース(定員20名)となりました。

大学院については、令和元年度、教職大学院が改組・拡充され、教職領域指導プログラムに書道教育サブプログラムが設置されました。本プログラムは書写・書道教育において、先導的な役割を果たし、高い実践力をもった有意な教員を育成することを目的としています。これまでに

第1期生が3名、第2期生が1名、合計4名が修了し、高等学校の芸術科書道や中学校国語科の教員となっています。また、現在、4名の大学院生が在籍しています。修了生の中で1名は芸術科書道の現職教員であり、教育委員会及び学校の許可を

得て、2年間、休職して教職大学院で研究し、現在は現場に戻り、全国の書道教育を推進する先導的な役割を果たすようになっていきます。また、専任教員として教育に従事しながら、連合学校教育学研究所博士課程に入学し、学術的な研究を踏まえ、実践研究をおこなっています。

現在、書道に関わる学部、大学院(教職大学院、博士課程)が整備されており、詳細を本学のホームページ等でご確認いただけます。幸いです。

この度書道学科のホームページおよびFacebookを開設しました。是非ご登録等お願いします。



学科ホームページ



学科 facebook

編集・発行 硯心会事務局 ☎184-8501  
東京都小金井市貫井北町4-1-1  
東京学芸大学 草津祐介研究室内  
硯心会HP <http://kenshinkai.grupo.jp>



硯心会HP